

日本の母と子 — 母子像研究を踏まえて

(前)九州大学大学院人間環境学研究院 教授
北山精神研究室 精神分析家

北 山 修 (きたやま おさむ)

1972年 京都府立医科大学卒業後、札幌医科大学内科研修生を経て、ロンドンのモーズレイ病院およびロンドン大学精神医学研究所にて2年研修。帰国後北山医院（現南青山心理相談室）院長。

1991年 九州大学教育学部助教授

1994年 九州大学教育学部教授

1998年 九州大学大学院人間環境学研究院教授

2010年 九州大学大学院人間環境学研究院教授を定年退職

日本精神分析学会前会長
医学博士

諺で「三つ子の魂百まで」「すずめ百まで踊りを忘れず」という。三歳からの人間の反復が、古い台本を今日も相手役を変えながら繰り返すという演劇の比喻で説明できるとき、多くがその台本の起源に関心をもつ。そのための私の浮世絵母子像の研究は1993年に出た『浮世絵のなかの子供たち』に刺激されて始めたものだが、100-200年前の人間の視覚的記録として、これほどの質の高さと数を有する一群の財産は世界的に見ても他に例がない、と今でも思い日本人として誇りに感じる。

この母子像を整理して行くうちに、その母子関係や人間関係にひとつの型が繰り返されていることに私は気がついた。つまり、浮世絵には同じ対象を共に眺める母子、あるいはカップル、人々が再三登場するのである。肩を並べて同じ者を見つめる家族。この構図は、成人のカップルや物見遊山の群衆、あるいは動物たちを描く絵にも盛んに登場する。その同じものをく眺めること<を意識して描いている二人の在り方に、絵空事ではない、現実のカップルの在り方を映し出していると考えた。やはり、これを見る鑑賞者の姿を、よりよく写し出す「鏡」になっていて、とくに絵を見ている私たちを照らし返す格好で、絵の中の二人も何かを見ているように設えられているという面もある。

私は、これらの同じ対象を眺める二人の姿に「共に眺めること」あるいは「共視」という名前をつけてみた。このように同じものを見るという物見の構図は、日本では浮世絵以外でも頻繁に登場し、父子像や、複数の大人たちが出てくる絵にも再三登場する。しかし、私の印象では母子像の場合が一番多く、その理由はこの姿勢が文化の継承や言語の取得、そして絆の確立などの点から見ても重大だからであろう。同時に、二人を開いて顔がよく見えるという、作画や鑑賞のための理由もあろう。

厳密に言うならこの婦人と子供が母子だとは限らないわけで、当時の母親は出産前後で死亡する

ことも多く、一方的に母子像という呼び方をするのもまずいかもしれない。このように曖昧な事情があるものだから、私はまず関係の詳細な中身よりも、この大人の女性と子供との関係を媒介する対象や距離に焦点をあわせて、主に分類の手掛かりを登場人物の姿勢という形になって客観的に見えるものだけに限り、大まかな分類を行うことにした。今回、絵の中の婦人と子供との関係を分類した7つのカテゴリとは、以下のようなものである。

- ・密着
- ・身体接触のある「共視」
- ・身体接触のない「共視」
- ・対面（直視）
- ・平行と支持
- ・無関係
- ・その他

213枚の婦人子供像を分類したときの結果では、母子関係を描く浮世絵における、私たちのいう「共に眺めること」の出現率は3割強で、もしこれに類縁の「平行」や「支持」を入れるなら、この中に登場する母親と子供の約半数が何かを媒介にして「つながり」を保っているように見え、これは非常に高い数字である。また、子供の年齢を想像して、推定年齢順に並べてみたところ、「甘え」が顕著で母子の密着度が高いと言われる日本人の発達も、加齢に伴い媒介物を介して開かれていくことがわかる。

北山修編『共視論』講談社 2005